網縁の日々

熊本シニアネットの十年

長谷川　博

二〇〇八年七月十五日
ダイジェスト版発行

網縁の日々

熊本シニアネットの10年

G分科会

高齢者福祉の新しいツールとしての シニアネットの取り組みについて

くわみず病院　長谷川　博

1．熊本での設立と経過

IT（情報技術）革命と呼ばれる昨今、米国では高齢者の情報格差が問題となっており、この解消の手段としてのシニアネット（以下SNと略）や生涯学習が重要となっている。

筆者は自らSN久留米のメーリングリスト（以下MLと略）に参加していたが、障害者の参加で会員がバリアフリーの意識をもつなど様々な効用を認めたため、熊本においてもSNを99年7月1日21名でスタートさせた。病院のデイケア室や喫茶店などにノートパソコンを持ち寄り勉強会を継続している。本年5月におけるサポーター会員（49歳まで）は47名（36%）、シニア会員（50歳以上）は70名（54%）、不明12名で合計129名（男79、女50）。入会条件に年齢制限を設けず当面の目的を以下のように明示した。

①シニアの孤立を無くし、新たな文化的、人的交流の空間を提供する。
②互いに教えたり教えられたりする気軽なシニアネットでともに成長することを目ざす。
③将来パソコン教室の自主運営も目指す。
④医療・保健・福祉・法律・年金・植物栽培など広範囲の専門家の参加でネット相談室開設を目指す。
⑤福祉的観点によるシニアネットに関する研究も同時に行う。同時にシニアをサポートするPCボランティア（パソコン＝PC）を募集する。

2．シニアネットの福祉的効用

SNは主にMLを中心として交流している。このメリットは井戸端会議、自己表現、お知らせ、アンケート、(所属)情緒的サポートなど様々な機能が存在し、全ての参加者を資源としてとらえることができる点である。

①予防福祉的役割（生きがいづくり）
・自立能力の強化/孤立・孤独化の防止⇒交流手段としての役目
・生涯学習/ホームページ制作：(自分史などあらたな自己主張の場)
②「地域」におけるニーズの収集
③バリアフリーの実現：
④情報の活用/情報格差の是正「経済的格差の是正はQOLを上げるための手段」
・高齢者の情報格差による経済格差の拡大を是正する。(例　航空運賃の場合)
・措置から契約へ：様々な福祉情報（WAMNETなど）を閲覧し自己決定に応用。
⑤ネットワークとしてのSNの役割：市民ボランテイアの組織、ライフラインとしての相談活動など。熊本SNは医療保健福祉関係者が多い。(医師2、栄養士1、薬剤師2、看護婦（士）8、臨床検査技師5、作業療法士1、理学療法士1、診療放射線技師5、保育士1、精神保健福祉士2、保健婦2、社会福祉士8など）人的資源を活用し、医療相談では経験豊富な医師を中心に、福祉相談では社会福祉士が窓口となり各専門家に回答を依頼。利用結果は医療2件、福祉2件合計4件と少ない。(その後福祉医療MLを設置）一方PC相談はMLによる質問が中心。MLで流れると若いサポーターや元大学教授が問題解決に活躍。
⑥その他の特徴：PC学習講師（美容師など）は自費で初心者用教科書を作成。ホームページ（HP）制作の講師は児童福祉分野で信望の厚い社会福祉士。この講座で70歳代の2名が自分史、癌闘病記をテーマに念願のHPを立ち上げた。

3．まとめ

これから情報へのアクセス手段や技術の有無による情報格差が生活のあらゆる面で顕在化する。シニアネットの学習活動による高齢者へのエンパワメントは重要だ。また獲得した新しいコミュニケーションツールはネットに集う多くの仲間との交流、あるいはニーズ把握を通して高齢者の生活環境改善運動につなげえる。SN運営を単なるPC学習の交流サークルで終わら

表紙は造形作家　川口喜久雄氏

目次

プロローグ　……1
ＫＳＮの発展過程　……2
なぜシニアにＩＴ（情報技術）が必要なのか
１９９９年のこと　2
背景にあったｅ―Ｊａｐａｎ構想　……3
主題：Ｅメール。ＣＣ：熊本の輝くシニアへ
本当にシニアはＰＣができないのか？……　4
答えはＮＯ、条件さえ揃えば問題ありません
メーリングとＰＣ学習を振り返って
第１回ＫＳＮ総会　１９９９年１１月６日　3
社会的活動
高齢者だってＩＴ革命
初の遠出は三角西港オフ会
交流企画部が頑張っています
口コミやマスコミで広がる会員数
メーリングの機能（CMC）
メーリングを利用してアンケート調査
地域貢献
第４回「くまもと・やさしいまちづくり」で表彰
地域での異世代交流
情報化展にも参加しました
１年間連載した「熊本シニアネットぴぽぱネット」
他のネットワークや機関との交流
九州のシニアネットの交流「レトロｉｎ門司
異文化交流：　日米シニア井戸端会議のこと
クラブ・趣味サークル活動
入会の特徴
保健福祉部のこと
板井保健福祉部長の講演会
シニア向け新聞発行された会員さんも
サロン（支部）活動について
世界のシニアネット
エピローグ　……4

プロローグ

地球が誕生して５０億年、人類が地球上で我が者顔で闊歩しはじめてまだ数万年だ。宇宙時間の中で、人類の一生はほんの一瞬で瞬きにも値しない存在である。その僅かな歴史の中で電気、電話機の発明など偶然と必然が織り込まれて現在を創りあげ、当初は軍事目的だったインターネットの原理がコミュニケーションツールとして転用され時の政治をも左右するまでの大衆の武器になった。この時代に生きて偶然にも出会った我々はこの文明を享受して距離を超え、時間を超えて地球の裏側とも既知の友のように話を交わすことができるようになった。ほんの２０年前には考えも及ばなかったことだ。時代背景は少子高齢化の進行が追い打ちをかける。子どもが独立すると親子の縁も次第に薄くなり、人生半ばあたりから心に「孤独」が忍び寄ってくる。いざ配偶者が欠けて一人暮らしを余儀なくされるとある者は生きる意欲を失うかもしれない。それとは逆に大家族の中での「孤立」が東北地方の高齢者の自殺の主原因という話がある。「自分は誰からも必要とされていない」という気持ちがそうさせるのだという。

その一瞬しか生きることのできない我々だから「孤独感に」囚われることなく最後まで輝やき続ける方法はないのだろうか。最後の最後まで生きていてよかったという「生」を楽しむ方法がその時代時代にあるのではないか。それを模索した中に「一見高齢者から対極にあると論じられている情報化社会の武器」の利用があった。それがインターネットを活用したネット（網）がつなぐ縁。それを誰かが網縁と言った。熊本シニアネットは疑いもなく網縁を推進する団体である。本書は熊本シニアネット創成時のはなし

を中心にこれから何を行い何をめざせばよいのかを筆者の「個人的主観」で資料を収集し当時を思い返して書き進めてみた。

二〇〇八年二月八日

長谷川博

＊本書ではＩＴという言葉を使ってますが単なるInformation Technology でなくて外国で一般にＩＣＴと言われるInformation and Communication Technology のことと解してください

略文字

ＰＣ：パーソナルコンピューター

ＭＬ：メーリングリスト

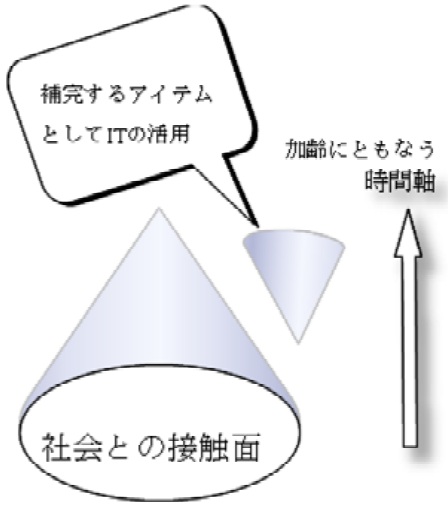
ＫＳＮ：熊本シニアネット

シニアネット仙台：ＮＰＯ「シニアのための市民ネットワーク仙台」のこと

ＫＳＮの発展過程

■なぜシニアにＩＴ（情報技術）が必要なのか

「シニアこそＰＣを・・・」



ITを活用してコミュニケーション・趣味・学習の拡大を
おこない、これによって社会との接触面を広げる

加齢に伴って狭まる「社会との接点」をＩＴを利用することによって回復させる一歩ととらえます。ただＩＴだけではなくてその周りの人的ネットワークが機能する仕組みを作るという周囲環境の調整が必要です。（これはインターネット環境が地域的に整備された上でのことです。）

補聴器があっても相手がいなければ会話は成立しません。眼鏡をかけてやっと手紙を書いたとしても出す相手がいなければ自分の思いを伝えることができません。ＰＣを学ぶだけでなく、それを電話機のようなコミュニケーションの道具ととらえ、外界との接点を広げるシニアネットのような基盤が必要になるのです。

これらを実現させようとする場合の前提にはまず最初に「使いやすいパソコン」、そして「地域的にネット環境」が整備されてるという前提での話です。

１９９９年のこと

ＫＳＮ創設の頃　まだまだパーソナルコンピューター（以下ＰＣ略）の家庭への普及は低く、ネットへのアクセス環境も悪くＡＤＳＬも実験段階の頃でした。パソコン通信からの乗り換え時期をすこし超えた頃だったのではないでしょうか。それでも高速回線は大学やプロバイダーには届いていた頃です。私たち庶民はＰＣモデムと電話回線やそれに少し毛の生えたようなＩＳＤＮ回線を主につないでいました。そんな環境で私たちの活動はスタートしました。

熊本シニアネット発足当時の呼びかけ文

――会則・方向性について――

基本は「シニアの孤立を無くし、新たな文化的、人的交流の空間を提供します」

①互いに教えたり教えられたりする気軽なシニアネットでともに成長することを目指します。

②将来パソコン教室の自主運営も目指します。

③医療・保健・福祉・法律・年金・植物栽培など広範囲の専門家にも参加して頂きネットで相談室（主に電子メールによる）が開けることを目指します。

④福祉的観点によるシニアネットに関する研究も同時に行います。

⑤異世代交流・バリアフリーの推進を行います。

特に不足が予想されるシニアをサポートするパソコンボランティアにもぜひ登録されますようにお願いします。

――――――――――――――――

熊本シニアネット入会要綱としてシニア会員を５０歳以上とし、シニア年齢以下をサポート会員として、入会の際には年齢制限はありません。老若男女、パソコンの得意な人から初心者まで様々な人々が集うネットです。・年齢や性別を含めたバリアフリーを実践していきます。・入会費無料　会費無料（*当時）　行事についてはメイン掲示板ならびにメーリングリストにてアナウンス予定です。・・・

こんな内容でホームページやチラシを作って宣伝しました。

７月２日熊日新聞朝刊２５面に掲載されたＫＳＮ開設の知らせに、ホームページを見ての電子メールや新聞を見たと封書で何通も入会申込書が事務局を兼ねる筆者の自宅へ届いて慌ててしまいま

した。開設から1年間の入会者は１５７名。２年目の２０００年には２０７名、２００１年度は２５５名とわずか３年で６１６名という大所帯になりました。

背景にあったｅ―Ｊａｐａｎ構想：土台整備

この会員の伸びは政府の考える e-japan 構想に後押しされた格好になりました。２０００年９月に「日本型ＩＴ社会の実現をめざそう」と時の森嘉朗首相が国会で所信表明してに明らかしたのです。その後２００１年の e-japan 戦略で「①すべての国民が安い料金でネットアクセスできるように、５年以内に超高速アクセスを可能に」「②電子商取引」、③電子政府の実現、「④人材の育成」「を目標に掲げました。その後　各地で一般市民対象のＩＴ講習が開催されました。ＫＳＮも多くの地域で講習会の講師を引き受けました。

教育普及部の活躍

行政などから要請があった場所にはなるべく出向くことにしました。障害をもっている方への講習も引き受けて頑張りました。そのＩＴ教育の旋風が去ったあとに、教育された人の継続研修や受け皿が各地に必要となりました。シニアネットがないところでは行政主導で各地にシニアネットが設置されてきました。（長崎のシニアネット普及には当ネットの福岡代表（当時）が基調報告をしました。教育普及部の課題としては講師によってＩＴ教育に個人差が出るため、何らかの基準が必要になりました。当時のＫＳＮの教育に携わる幹部がシニアネットフォーラムでその資格制度に出会いました。そして「シニアがシニアにＩＴ教育を行うときの資格制度」として シニア情報生活アドバイザーをＫＳＮで採用することになりました。これは、通商産業省（現経済産業省）の外郭団体のニューメディア開発協会によって実施される教育です。これが導入されることによってシニアのＩＴリーダ育成においてはＫＳＮの講習関係の活発化を開いたといえます。そこで学んだことを地域に広めていく核となります。そうしたシニアの教育は地域の活性化にもつながっています。

主題：Ｅメール。ＣＣ：熊本の輝くシニアへ

KUMAMOTO/OITA　　CHANGING JAPAN

Subject: e-mail. CC: Kumamoto's golden oldies

Resistance to the strange new technology that has deepened the generational gulf is being overcome through a citywide project that reconnects old and young.

By ATSUSHI KASHIMOTO
Asahi Shinbun

ASAKO SHIMEUN

Atsuko Oshiumi plays with her personal computer at her home in the city of Kumamoto.

Electronic messages zip back and forth over the Internet. "I'm happy to be able to talk to so many people," reads one. "I have a long way to go before I can send and receive e-mail," says another. The Kumamoto Senior Network (KSN), launched in the southern city in July, is bringing older citizens together in cyberspace.

KSN members can exchange news via e-mail and also use the network to learn about the latest medical care and consult on lifestyle issues. Interest in KSN has focused on its potential as a new form of welfare for the old that overcomes the sense of many older people that they are living in a different world from today's information-rich society.

While watching a television program, Atsuko Oshiumi heard an unfamiliar word: Internet. She thought it must be a kind of net linking the world together. Then in spring, while she was living alone in Kumamoto city, her son brought a notebook-sized personal computer for her when he returned from Tokyo. He expected his 75-year-old mother, whose husband died, to enjoy her life through the Internet and escape her loneliness.

Oshiumi, who runs a tobacco shop, didn't know how to use the PC. Although she read the manual, she was unable to use the PC because the manual was filled with many English words that she couldn't understand. So she got help from a neighboring senior high school student.

Her doctor then informed her about KSN, a group of elderly people using the Internet. With colleagues her own age, Oshiumi learned how to use her PC.

"After I tried to learn it, I found I could handle the PC better than I expected," she said.

She has made such progress that she is now able to send e-mail and is attempting to master the rules of such games as mahjong and shogi.

After mastering the rules, Oshiumi intends to enjoy playing the games on her PC.

"I didn't have a hobby before. But now I'm living my life by making use of the computer," she said.

KSN is the brainchild of a concerned group of citizens but was principally instigated by Hiroshi Hasegawa, 46, a radiology technician from Kumamoto city. Hasegawa says: "Many of the aged are searching for a worthwhile life. I wondered if the information society couldn't be harnessed to this quest."

While emphasizing the interests of the elderly, KSN is not itself "ageist." About 70 members range in age from 13 to 79. Half are "senior members" over 50 years of age. Younger members provide technical and attitudinal support.

The basic activity is e-mail exchange between members on the mailing list. Entry is free of charge and, if you become a member, you may participate freely in the exchanges. The contents of these "conversations" vary: one will note that a restaurant serving favorite dishes has opened up, while others report the progress of a kidney transplant or discuss the nursing-care insurance system.

Once a week members meet at a coffee shop in the city, and at times a group of e-mailers will go off together to a hot springs resort. Hasegawa points out: "The opportunity is given to get the aged out of their homes, and exchanges occur across the generation gap."

KSN has initiated consultations on medical care, welfare and other topics affecting their livelihood. These consultations put the elderly in touch with doctors, social welfare workers and other professionals, all of whom rank as KSN members in their own right. The aim is to enable the aged, using the network as a lifeline, to look after themselves and regain independence wherever they can.

The network has spawned its own research section. By ascertaining what elderly members think on various issues, the section hopes to become a forum that can propose sound old-age policy initiatives to the city government.

The initial hurdle is how to familiarize the aged with the PC itself. To this end, KSN is calling for more computer-literate people to come forward and join the program. Hasegawa said: "Eventually we would like the aged to teach each other. If that can come about, it will be easier for first-time computer users to get started."

KSN's members will soon hold a meeting in real time to plan the launch of a revamped home page.

KSN's home-page address is: http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Orion/8518

Asahi Evening News 1999-12/15より

電子メッセージがインターネット上を行き交っている。「とてもたくさんの人とお話出来て、嬉しいです。」と言っているメールもあれば、「メールが出来るようになるには、まだまだ長い道のりです。」との声もある。

７月にスタートを切った熊本のシニアネットワーク(ＫＳＮ)は、サイバースペース上に高齢者を集めている。ＫＳＮのメンバーはＥメールを使って情報交換をしており、最新医療について学んだり、様々な生活上の問題を相談したりもできている。

ＫＳＮは、「現代の豊かな情報社会は自分達とは違う世界だ、」と感じている多くの高齢者の気持を克服させるためにも、高齢者福祉の新しい形としてのインターネットの可能性に注目している。

あるテレビ番組を見ている時、鴛海あつ子さんはなじみのない言葉を耳にした。“インターネット”：彼女は、それは世界をひとつに結びつけるための、ある種の網のような物だと思っていた。

ある日、彼女が熊本市で一人暮らしをしていた頃の春であるが、息子さんが東京から帰って来る時に、あつ子さんにノート型パソコンを持って来てくれた。息子さんは、夫を亡くした７９歳になる母がインターネットをすることで、孤独から抜け出し、人生を楽しんでくれる事を期待していたのだ。

鴛海さんはタバコ店を経営しているが、彼女はＰＣの使い方が全く解からなかった。　マニュアルを読んだが、彼女が知らない英語が一杯で、さっぱり理解できなかったので、　あつ子さんは隣の家の高校生の手助けを借りたのだった。

また、彼女の主治医が、高齢の人たちがインターネットを利用しているＫＳＮというグループがあると、教えてくれた。鴛海さんは彼女と同年代の中間とＰＣの使用法を学ぶことが出来るようになった。

「ＰＣの使い方を習いだしたら、思ってたより簡単に使えたんですよ」とあつ子さんは語っている。

今や彼女は電子メールはもちろんのこと、マージャンや将棋などのゲームのルールをマスターしようとするまでに上達した。

今は、そのルールをマスターして、ＰＣでゲームをするのを楽しみにしているそうだ。

「私は以前、全然趣味がなかったんです。でも今は、コンピューターを利用する事で、より良い人生を生きています」と語っていた。

ＫＳＮは市民グループによる発案だが、主に熊本市の放射線技師　長谷川博（４５）によって、生み出された。長谷川氏によると、「高年層の多くが生きがいを捜し求めています。私は、この答えに情報社会を利用できないだろうかと思ったんです。」

シニアが強調されてはいるが、ＫＳＮ自体は「年齢主義者」ではない。入会には年齢による差別はまったくない。１１歳から７９歳までおよそ７０人の会員がいるが、半分は５０歳以上の「シニアメンバー」である。

基本的な活動はメーリングリストを利用するメンバー間のメール交換だ。年齢が若いほうの会員（サポート会員）は技術的なサポートを提供している。入会は無料で、会員になったら自由に意見交換に参加できる。

メーリングリストの「会話」の内容は様々である。ある人は、料理がおいしいレストランのオープンについての情報を流し、またある人は、腎移植の進歩状況を流し、介護保険制度についてメールで議論したりもしている。

週に一度の割合で、会員達は市内の喫茶店で会合を開いているが、時にはＭＬで知り合ったグループで、温泉に一緒に行ったりもするようになるだろう。

長谷川氏は以下のように指摘している。

「ＫＳＮは、高齢者が外出する機会を与えていますし、異なる世代間の交流も生まれています。」

ＫＳＮは、高齢者の生活に影響を及ぼす医療や福祉、そして他のさまざまな問題の相談に応じる事も始めた。この相談は医者、福祉関係者や他の専門家が対応じており、その人達もＫＳＮの会員だ。ライフラインとしてＫＳＮを利用し、高齢者が出来る限り、自分の事は自分でし、自立を回復できるようにするのが、この相談の目的である。

そしてまた、ＫＳＮは自分達の調査部門も発足させた。 高齢のメンバー達がどのような問題を抱えているのかを確かめることによって、市行政に提案できるような部になることを、ＫＳＮは望んでいる。

最初のハードルは、シニアをいかにしてＰＣ自体に慣れ親しませるかであるが、それを解決するためにも、コンピューターができる人達の参加を呼びか

けている。

長谷川氏は、「最終的には、シニア会員達にお互いに教え合って欲しいんです。もしそれができると、初めてＰＣを使う人達も、より参加しやすくなりますから。」と語っている。ＫＳＮ会員達は、ホームページの更新についての会議を、まもなくリアルタイムで行う予定である。

……

シニアネット紹介についてまずこのニュースを持ってきた理由は、現在置かれている環境やシニアのＰＣに対する共通した事柄がきちんと表現してあります。一人でＰＣの学習をやるのは難しいこと。一人暮らしでＰＣができるようになったときの新たなな喜び、趣味の拡大にもつながっていくことなどがうまく書かれているからです。

〔余談：この記事をざっと訳した著者はとてつもない誤りを犯しているのではないかと心配で英会話学校をやっているとても活発な会員の田中成美さんにメールで原文を送信して教えを乞うことに。さすが専門家です。短い時間に、ちゃんとした意味の通った日本語になって戻ってきたのです。このお礼は現在共通話題のペルー料理になりました。この話はまたあとで出てきます。ＫＳＮは、ほんとうに人材が豊かなことを日々実感しています。〕

本当にシニアはＰＣができないのか？

答えはＮＯ、条件さえ揃えば問題ありません。

１９９９年夏に、ひとつの実験を行いました。それはＫＳＮへの入会を手紙でくださった方でネット環境のない方と会員の知り合いで５０歳以上の方でインターネット接続未経験の方を募集して実験することにしました。

（表１ 被験者基礎データ:パソコンの経験 ）

年齢	性別	パソコンとワープロの違いは分かりますか？	パソコンに触った経験はありますか	パソコンの経験の期間
76	男	分かる	有	半年～1年
52	女	分からない	有	半年～1年
50	女	分からない	有	1年～3年
50	女	分からない	有	その他
50	女	分かる	有	1年～3年
69	男	分かる	有	その他
52	女	分かる	有	3年以上
59	女	分からない	有	半年以内
64	男	分かる	有	半年以内
56	女	分かる	有	半年以内
79	女	分かる	有	半年以内

パソコンとワープロの違い…分かる 7:分からない 4

１９９９年８月に実施したインターネット体験の風景

初めてインターネットを体験する実験では、被験者は１時間の講義のあと、大学にあるＰＣでインターネット初体験を行いました。その前後にアンケートを取り、３ヶ月後まで追跡しました。。

（右端で指導されている紳士は籏野脩一ＫＳＮ代表（当時））８月４日，１８日．２５日に実施し５０歳から７９歳のシニアが参加した。

インターネット未経験である初心者のわずか２時間の実習をはさんだアンケート結果で「インターネット」に対する態度の変化を考察してみました。

体験前のアンケートでは「③インターネットの知識」について「マスコミでの知識（８）、全く知らない（２）、よく分からないが知っている（１）」という状況のなかで『インターネット接続に関しての希望』は、回答者全員が「インターネット接続を

希望するが自分ひとりではできない」と足踏みした回答につながっていました。

その後の２時間のネット体験後の結果において６人は「興味はあるが一人ではできそうもない」と技術的不安を訴えながらも他の５人のメンバーは、「自分にも出来そうだ速やかに参加したい」（２）、「さっそく勉強してホームページを持ちたい」（２）、「電子メールからスタートしたい」（１）などという具体的な要求に変化している。体験によって「自分もやりたい」という意識が強化され、インターネットへの興味の変容があったのではないかと推察されます。しかし２名を除き何らかの援助を求めながら３カ月後にはインターネットが接続できるようになった結果をみると「援助の要求」も積極的意味に変化したのではないでしょうか。

このことはわずかの時間でも実体験をしてもらうことが「シニアにとっての未知のインターネット参加」を促していることを示しているようです。

『インターネット利用上での不安に』ついては「詐欺にあう」「パソコンがウイルスに感染する」「技術的不安」と「盗聴される」などがあった。その解決法にはやはり過半数が

「熟練した先輩の支援（７）」を求め、簡単接続のパソコン利用（２）、パソコン教室（２）に通うという解決法を呈示している（盗聴法に反対するも１件あった）

『自由記載』ではインターネットを行なうことに対して「孫にメールをやりたい」という願望や「機械に使われないように」という戒めもありました。

「高齢者の仲間づくり、趣味を広げる」など交流範囲の拡大を意識した言葉も見受けられました。またネット体験したあとに記述された可能性の欄には「情報」についての記述が３名、「豊か」「立派」などの言は肯定的であるが「まだわからない」「大変」という記述もありました。

３ヶ月後、まったくの初心者１１人中９人が電子メール利用が可能となった主な原因は要求に対して介入支援を行なうシニアネットという援助組織の存在あるいは援助可能な家族（主に子ども）があったことです。被験者のなかではその後６名がオンライン接続でのプロバイダー契約を援助してもらっており、この中の２名はパソコンショップへの援助者の同行によって機種選定を行っています。また３名は娘や息子という家族による援助がありました。つまり援助者の存在が特に重要です。３ケ月後のインターネット未接続者２名は援助を申し出なかった人です。実験の結論としては：初心者がインターネット体験という一つの動機のみにあと押しされて進んでいくのは、ごく一部の人だけで、気力のみでは到底解決できない問題です。オンラインでのプロバイダーへの加入申し込みの場合、電話線とパソコンをつないだ瞬間に回線の選択事項であるパルスとトーンの設定で行き詰まってしまうことがあります。また一番迷うのがパソコン機種選定です。さらにメールやインターネットソフトの使い方は独学では行き詰まってしまうことがほとんどです。それらのサポート体制が初心者パソコン教室などを継続的におこなうシニアネットという組織にあったものと考えられます。なお全員が実験前に何らかの形でＰＣに触れたことがあったことの考慮が必要で、まったくはじめてＰＣに接し、キーボードから学習する場合にはさらなる援助が必要になるでしょう。

（この実験は１９９９年８月に実施しましたが、当時はまだ光回線やＡＤＳＬもなく電話回線、ＩＳＤＮを利用していた頃のことで家庭にてインターネット接続には複雑な設定が必要なもの多くありました。）オンラインサインアップ、パソコンと電話回線の設定、機器購入の助言、メールソフトの使い方それぞれに援助が必要でした。援助方法も１人の初心者にパソコンサポータが一人以上付いて指導するのが一番効果的であるようです）。

その他の特記事項

・インターネット初体験に参加して頂いた７６歳の男性は、心臓発作当日に「風邪をひいた」という健康状態と「ＫＳＮのパソコン教室に行けないだろう」という報告をシニアネットのメーリング上に発信し、翌日亡くなられました。遺族からは「父はメールを出したり、見たりするのを楽しみにしておりました」との便りを頂きました。インターネット初体験からわずか４ケ月のことです。男性はその間に行われたＫＳＮのパソコン教室、ホームページ教室などへ欠かさず参加される常連になられていました。熊本シニアネット総会にも参加され、人と出会う交流を楽しみにされていました。残念な事例でしたが

インターネット（中でも電子メール）と出会って最期まで社会とつながって前向きに学ばれていたことはむしろ素晴らしい人生ではなかったかと考えます。

メーリングとＰＣ学習を振り返って

当初を振り返れば、シニアの参加は少なく、メーリングリストには学生同士、サポーター同士の話が飛び交い「シニアネットの名前を変えたら」というメールが投稿され、いまでは考えられないほど閑古鳥が鳴いていたことが懐かしく思い出されます。場所確保が困難で、パソコンの勉強会は喫茶店で行うときにはコーヒ-代金に１００円を上乗せして電気代として払うという取り決めをしたり、会員のクリニックでデイケアの机にノートパソコンを持ち寄って顔を寄せ合い疑問を投げかけあっていた頃が懐かしいです。（そのクリニックに６月龍田サロンが開設されました。）ＰＣボランティアの野瑞氏、中川氏、亀川氏、緒方氏にはこの頃から手弁当で頑張っていただきました。

パソコン研修のあとミニオフ会を行い自己紹介で知り合った大勢の仲間がいます。（この頃はパソコン教室ではコーヒータイムに参加者一同自己紹介をしてお互いの近況を報告しあっていました）時にはクリスマスプレゼントの交換などを行い少人数だからできる和やかな交流をしていました。

第１回ＫＳＮ総会　１９９９年１１月６日

そのような背景で開催した第一回総会は場所を熊本学園大学の教室を借りて、シニアネット久留米の古賀事務局長を講師に「ビバ・シニアネット

シニアよパソコン持って自立せよ」という力強い内容の講演で勇気付けられました。そして総会を盛り上げようと半分は久留米の仲間 で席が埋まりました。久留米関係のメンバーは、松隈、吉田、須佐、石橋、村田、井上、舎川、最上、一方設営関係で大学院制でサポータの楳木、香月、司会は田代が担当しました。中嶋、国宗、大田、西川、西村、野端、工藤、波野、粟元、藤田、窪田、扇谷、板井、上野、田辺、丁端（（窪田さんと一緒に参加されたシニアライフアドバイザーも含む）天草からは大森さん、特記すべきは山口県宇部市からの参加者で益田哲好・良子夫妻がはるばる駆け付けられました。そして簇野代表、事務局の長谷川の計３３名が参加しました。 総会後の交流会は渡鹿の「うたごえ喫茶ふらっと」で２２名が参加して開催。これが現在も恒例となっている総会後の交流会の第一回目でした。シニアネット久留米からの参加者は。松隈、石橋、古賀、須佐、舎

川、井上氏、熊本からの参加者は板井、野端、木之下（故人）、西川、籏野、田代、国宗、西村、工藤、窪田、香月、丁畑、扇谷、益田夫妻、長谷川、この日が熊本シニアネットが他のネットワークとの共同の第一歩でした。（敬称略）

第二回総会は水前寺共済会館で行われました。講演はシニアネット仙台の佐藤和文理事にお願いしました。河北新報で「夕日は沈まない」を連載され、それがシニアのネットワーク作りに発展した特別な経験とリーダーシップを持った方です。（後の「日米井戸端会議」の仕掛け人の一人です）

パソコンをメインにしながらも、宅老所、配食サービス、各種ボランティア活動など幅広い福祉活動をやっているシニアネット仙台（正式名称　シニアのための市民による仙台ネットワーク）のユニークな活動報告がありました。

熊本はどんなネットを目ざすのか事務局自体が迷っていた頃です。そのとき、シニアネットは大きさ（財政的基盤や会員数）ではなく「人と人のつながりのネットで何を実現するか」ということがおおきなヒントになりました。

さてネットで熊本らしいことをやるためには、文殊の知恵・集団の力が必要です。それまでは何から何まで、事務局でやらなければなりませんでした。名実ともに集団的民主的な運営がはじまったのは、第二回総会直前のこと。それ以降、いろんな仕事の実務分担ができるようになりました。とりわけ集まれる場所の確保ができたことが一番の要因でした。経過は省きますが、会員の安藤氏（歩師奇屋主宰）が「ここを使ったら」との一言で熊本シニアネットの運命は大きく変わったのです。

それからは、いつでも集まって会議をすることが出来るようになりました。白熱した議論では午前様になることがありましたが、会議で決定したことは再確認しながら確実に実行していく頼もしい組織集団というのを感じました。年齢差や過去の職責に関係なく、限りなく平等に発言できるのは今でも変わりません。

それから数年後には７２０名の会員を有するまでに発展しました。第五回総会では「シニアの生きがいづくり」のテーマでシンポジュームを行いました。

「ネット」の機能生かせ

熊本市　熊本シニアがシンポ

「シニアの生きがいづくり」のテーマで意見を述べるパネリスト＝熊本市

パソコンを通して人と人のネットワーク作りを展開する熊本シニアネット（福岡籌夫代表）が二十七日、熊本市千葉城町のＫＫＲホテル熊本で「シニアの生きがいづくり」と題したシンポジウムを開いた。

同団体は高齢者の孤独をなくすことなどを目的に一九九九年に発足。ネットでの情報交換のほか、釣りやハイキングなどの趣味の交流、ボランティア活動などをしている。現在、メール会員は約七百二十人。

熊本学園大の天田城介助教授や福岡代表ら四人のパネリストによるシンポジウムは同団体の役割を中心に意見交換。「ネットの機能を生かし、自宅にいてもサロンに参加できる仕組みを作る必要がある」「〝情報弱者〟の救済に社会福祉協議会などとの連携が不可欠」などの意見が出た。

シンポジウムに先立ち、天田助教授が「シニアネットの社会貢献と生きがいづくりの接点」の演題で講演した。

男女共同参画でＮＧＯが研修会

来月2日、熊本市

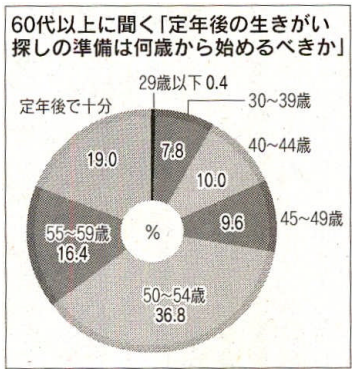
一九九五（平成七）年の第四回世界女性会議を機に結成したＮＧＯ（非政府組織）のネットワーク「北京ＪＡＣ」の九州・山口・沖縄地区研修会が八月二日、熊本市手取本町のくまもと県民交流館パレア第一会議室である。

熊日新聞

「社会的活動」

私たちＫＳＮの社会的活動は目に見えるものばかりでなく、閉じこもりがちな高齢者を外へ外へと誘導することも大きな使命です。楽しいサロン企画、音楽会、お話し会、料理教室などいろんな道具で誘い出すこと、そして仲間になって「自分自身が」誰かに必要とされていることを自覚させる活動でもあります。

またこれからシニアになる人への伝言も大事でしょう。新聞記事（参照グラフは２００４年４月２５日・日経新聞１１面セカンドステージのアンケート６０才以上の５００人に聞くから）では定年後への生きがい探しの準備は５０歳から５５歳の間にすべきという最多の回答がありました。５５歳以降では遅すぎるのかもしれません。早めにシニアネットに入会されて趣味探しを開始しても遅くはないようです。



高齢者だってＩＴ革命

嘉島町の歩師奇屋がシニアの拠り所になったのは２０００年８月１日のこと。それまで根なし草で集まっていた仲間がやっと一同に集える場所ができました。２０００年１０月２８日熊日夕刊１０面にはここを会場にオフ会風景が楽しそうに報告されています。

高齢者だって「ＩＴ革命」!?

ホームページ通じ交流

オフ会や講演会も実施

県内にはインターネットを通じた高齢者のネットワークがある。ボランティアによる「熊本シニアネット（ＫＳＮ）」（渡野絹一代表）が、ホームページを作って活動を始めたのは昨年七月。当初、十一人だった会員は、新聞報道や口コミによって一年で二百人余りに増えた。

入会金も会費もない。正会員は五歳以上で全体の七割。構成はサポーター（支援）会員を含めた八十七歳から十一歳まで幅広いが、六十代が一番多く、女性も三割を占める。半数は初心者で、パソコンを持たない人もいるという。

「夕暮れに高齢者の生きがいづくりのシニアネットがあるのを知って、これぞ熊本にもち上げようと熊本学園大の先生や学生を中心に始めたんです。孤立しがちな高齢者にコミュニケーションの場を提供したい」と事務局の長谷川博さんをミ

ホームページは会員が自由に書き込める掲示板や、操作で困ったときのお助け相談、女性会員だけのおしゃべりコーナー、お知らせコーナーと盛りだくさん。会員同士のメール交換も多い。最近は、ハイキングなど会員が実際に顔をあわせるオフ会も増えている。

活動はこれにとどまらない。操作なども会員のＳＯＳが続くと、近くに住む別の会員がわかる範囲で教えてくれる。「みんなが先生、みんなが生徒」独自に開くパソコン教室やホームページ教室も熊本は会員だ。十二日には一般参加ＯＫの講演会を予定している。

【ＫＳＮ講演会と総会・交流会】

▽日時＝19日午後2時～

▽水前寺共済会館（熊本市水前寺3の30の18）

▽講演　「私が主役－シニアネット仙台」の所（仙台市北新報青葉部副部長）

▽総会・講演は入場無料。だれでも歓迎。交流会（午後5時半～）3500円

昨年7月に活動を始めた「熊本シニアネット（ＫＳＮ）」のホームページ。熊本市に賛同したプロバイダーが無料でスペースを提供してくれた

http://www.ksn.kaos.ne.jp/

オフ会で顔を合わせたＫＳＮの会員たち。会場は、高齢者が集まっていろんなことができる場になれば―と会員のひとりが自宅を「歩師奇屋」と名付けて提供している＝五城町嘉島町

高齢社会の未来探ろう

蘇陽町でフォーラム開幕

地元住民ら150人が参加

住民参加の保健福祉行政を進める阿蘇郡蘇陽町の取り組みなどを踏まえたフォーラム「高齢者の自立と地域の再生」が二十七日、同町行政センターそよ風パークで開幕した。熊本大学地域連携フォーラム「高齢社会の総合研究プロジェクト」の主催で、二十八日まで。

地元住民ら約百五十人が参加。山下勉法学部教授が「少子高齢社会の行方―成熟社会と人口問題」と題した特別講演で「高齢化を食い止めるのは無理で出生率を引き上げるには財政負担が大きい。構造改革を進め人材を育てる社会をつくるべきだ」と強調した。

パネル討論では、宮北隆志・熊大医学部講師や福岡壽夫・熊本シニアネット副代表、くまもと高齢社会をよくする女性の会の馬原志磨子事務局長が活動を報告、意見を述べた。

二十八日は講演「１８０万県民の高齢社会―安心の制度と持続可能社会」（窪田隆穂・熊大非常勤講師）などがある。

熊大地域連携フォーラムは文・法学部が一昨年十二月設立。「高齢社会の総合研究プロジェクト」は昨春、各学部の教授陣や県内の福祉関係者らが高齢社会を学際的に研究しようと発足。本年度から同フォーラムの部門に位置付けられた。

ＵＤ（ユニバーサルデザイン）探検をしました

高齢者や障害者にとって暮らしの中で様々な障害物や段差を発見します。その逆に使いやすい建物やトイレ、商品配置などを見つけたらデジカメにとって記録します。ＫＳＮは熊本県と協力して、車イスに乗ったまま食事できるレストランや、足幅が少ない龍田公民館のスロープ、斜めに陳列して低い位置でも品物が確認できるお店などの紹介をしました。結果は県のホームページ「熊本シニアネット探検隊　ＵＤギャラリー事例集にあります。」右写真のそよ風パークでの帰り道にも探検に回りました。

初の遠出は三角西港オフ会

交流会は楽しいもの

最初のお見知り遠足のようなオフ会は２０００年３月２６日　三角西港お花見会でした。三角西港日帰りツアーは熊本駅で待ち合わせ、誰が誰かわからないので、用紙にＫＳＮと書いて立っている、メンバーへ歩み寄って自己紹介から始まりました。各自切符を買って三角駅方向の列車に乗ってその間もいろんな会話が弾みました。三角西港まで歩いて、散策し食事をするという段取り。居酒屋でのオフ会も数回企画。最せいぜい十数名の参加だったが、行事のあとには参加者の感想がメーリングを飛び交いました。参加できなかった方はぜひ次回はと決意されるのであった。その後しばらくして女性フォーラムが立ち上がって頻繁にオフ会が開催されることになった。

最近では１５０名規模の大交流会が年に２回開催されています。観桜会やバス旅行も年々盛んに。

交流企画部が頑張っています

写真は８回総会後の懇親会です。名刺交換したりサロン紹介やら、クラブ紹介、踊りや歌、マジックショーもあります。総会の次は秋に新入会員歓迎会を同規模でを行っています。計画には緻密さが要求され、久米部長の采配のもと交流企画のメーリングで参加状況や準備の確認など行って本番を迎えます。

教育普及部まずはお助け塾からスタート

当初は数名の限られた講師によるＰＣ教室でした。写真はくすのきクリニックデイケア室での野瑞先生の「初心者ＰＣ教室」１つの画面をみんなで見て和やかに進みます。（９９年１２月）

日新聞　平成12年(2000年)1月17日　月曜日

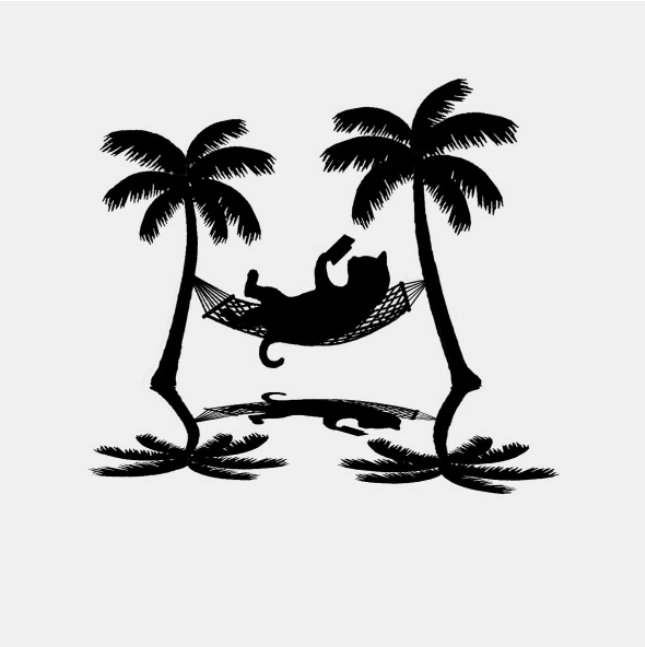
中高年のパソコン習得

メール仲間が自宅で個別指導

お助けします！

「熊本シニアネット」の初心者講座で互いにアドバイスし合う会員たち

２００１年以降　ＫＳＮのお助け塾を歩師奇屋の一角のＰＣ教室でスタートしました。毎日交代で駆けつけＰＣ談義に花が咲きました。当番以外の人もちょくちょくお話をしに来られました。



少しの疑問も解決すると次のステップに挑戦していきます。

パソコンさらに身近に

シニア世代も夢中

孫にメール、趣味の絵手紙…

友達作りにも一役

熊本シニアネットの「お助け塾」。分からない点は同年代の講師がていねいに教えてくれる

3　3版　新聞定価1カ月　セット版＝朝夕刊 3,364円（本体価格3,204円消費税160円）

楽しい高齢者パソコンネット

☎「パソコン仲間が欲しい」と載っていましたが、熊本シニアネット（KSN）という高齢者がメールを楽しむグループをご紹介したいと思います。定年退職してパソコンを購入したものの、同世代の仲間でもっとパソコンライフを楽しみたいとのお話でしたが、そうした方にぴったりの集まりです。

＜高齢者のパソコン熱も高まっていますね＞

パソコンに初心者がなじむには同好の士の励まし合い、サポートが一番。KSNではサポーター会員がボランティアの教室を開いてくれますし、オフ会という、顔合わせの会も始まっています。メールで毎日、おしゃべりしたり、暮らしの知恵、情報などを交換します。

＜そういう仲間をどうして探しましたか＞

熊日紙上で見て「これだ」とすぐ申し込みました。昨年七月発足して今、百六十人余りの会員になったそうです。ホームページのアドレスはhttp://www.ksn.kaos.ne.jp/　電子メールは事務局・長谷川博shiro@ac.mbn.or.jpです。＝熊本市、無職・男、75

メール開通で多忙な夫

☎「こちら編集局」のおかげで主人のパソコンの電子メールが「開通」しました。以前とは見違えるようにパソコンライフを楽しんでいます。実は、主人は定年退職してパソコンを買いました。町の教室に通ってひと通りは習ったようですが、やはり操作に四苦八苦。もっとパソコンを楽しめないか、と電話したら、掲載され、紙上で「熊本シニアネット」が紹介されました。それどころか、ネットの方が親切にアドバイスされ、メール仲間にも誘っていただきました。私はまだ仕事を持っており、主人は毎日が日曜日。ところがこのメール開通で主人は毎日が退屈どころではなくなったようです。やはり同好の士の集まりはいいようですね。＝上益城郡、主婦、52

熊日新聞「こちら編集局」がつないだＫＳＮの仲間たち・・・・たぶん入会されたのは酒奉行さんだったのでは？・その後　交流普及部長として大活躍されました。「ＫＳＮがあるよ」と投稿されたのはメダカ（一号）さんだったと記憶してます。

（氏名は会員でないと分からない（^^;）ハンドルネームという暗号を使ってます）

メーリングの機能（CMC）

コンピュータを仲介にしたコミュニケーション

その中でもメーリングに対する効果は一対一の関係とは異なり一対ｎまたはｎ対一の間を行き来します。話題によってはひとつのコミュニティを揺さぶることもあります。そんななかＫＳＮのメーリングの特徴として以下の８つが考えられます。

（シニアネットにおけるメーリングリストの効用について）

①参加者一人一人を人的資源として捕らえることが出来る。

②情緒的サポートの存在

③所属 存在のサポート関係の存在

④ゆっくり考えながら文書を書ける

⑤井戸端会議の機能

⑥自己主張 独り言による発信機能

その他のメーリングの効用について

⑦お知らせの効用

⑧「アンケート調査の可能性」

自分の考えと他の人の考えがどう違うか客観視が可能です。（メーリング上に回答が寄せられるとき）

メーリングを利用したアンケート調査

ＫＳＮは朝日新聞に協力してネットアンケートを行いました。２００１年８月１２日（掲載日）「ビール。発泡酒について：あなたの好きな銘柄は？」９月１６日には「パソコンは何がよい？」１０月２８日には「習い事について」そして１１月は「味噌汁の具について」という内容でした。その他「旅行にいくならどこ？」など素直なアンケートがありました。毎回５０名のアンケートの回答を集めて福岡壽夫副代表がまとめて送信。その謝礼がＫＳＮの唯一の収入源でした。アンケートでメーリングが活発になって一石二鳥の効果がありました。幸いなことにこの謝礼で第二回ＫＳＮ総会の講師を仙台から招くことができました。

人気の具ランキング

①豆腐　ほかの具と合わせやすい。ナメコなどとの相性がいいとの意見多数

②油揚げ　かんだとき出てくるうまみ

③ワカメ　髪が薄くならないように

④キノコ　香りと食感。キノコ狩りでとってきたものの味は最高

④サトイモ　あのコクと甘みが好き

（熊本シニアネット調べ）

Myチョイス

■みそ汁の具

熊本県在住の年配者を中心にした10―70代の50人に聞きました。みそ汁にまつわる思いや感想はさまざまでした。

好みと家風、それぞれに

夫はソーメンを入れるのが好きだが、私は機嫌のいいときにしか作らない（54歳女性）▽結婚して、キュウリを具にされびっくり。妻の故郷では当たり前というが、カルチャーショックだった（46歳男性）▽ワカメのみそ汁に少量のバターを入れるとグー（73歳女性）▽母がつくる。ワタシは食べる（23歳女性）▽最近夫が作るのだが、即席の方がおいしく思う（55歳女性）

地域貢献

シニアネットは地域を活性化します。

第４回「くまもと・やさしいまちづくり」で表彰されました。

２００１年２月１６日には「やさしいまちづくり授賞」・・所用で出席できなかった籏野代表に代わって潮谷県知事から賞状を受け取る福岡副代表にたくさんの拍手が沸きました。

新聞記事は年末恒例となっている嘉島町の郵便局がら委託された手作り年賀状講師をされる日高不二彦さん。（現顧問）

パソコンに向かい年賀状づくりの説明を受ける参加者ら＝嘉島町

バーの指導で、約2時間かけてインターネットから画像を取り込みオリジナルの年賀はがきを作製。フロッピーディスクに入力して持ち帰った。

●「人権の花」運動イベント　14日、御船町小坂の小坂小（早川宏次校長、196人）であった。6年生の小林卓洋君（12）ら各学年代表の6児童が「周囲の人に思いやりの心を持って接したい」などと人権をテーマにした作文を朗読。全校児童と近くの知的障害者更生施設第二明星学園生15人が、ヒマワリなど6種類の花の種を付けた風船252個を飛ばした。熊本地方法務局御船支局と御船人権擁護委員協議会が昭和58年から実施している同運動の一環。初トパ

●IT手作り年賀講習会　14日、嘉島町上仲間の展示・集会施設「歩師奇屋」（ふしぎや）で開かれている。16日まで。嘉島郵便局（鶴田平局長）が地域への文化貢献を目的に初めて実施した。町内外から10人が受講。県内のパソコン愛好者でつくる熊本シニアネット（旗野脩一代表）のメンに使いたい」と話している。

地域での異世代交流

２００２年度から毎年「あそんどらんど」に参加してきました。会場は慈愛園（神水サロン）。ここでは竹細工やお手玉、竹トンボ、チョンカケゴマを担当し子どもたちに教えながらシニア自身が遊んでもらいました。

情報化展にも参加しました

企業や学校などが参加し展示する情報化展にもシニアネットのブースができました。交代でブースの説明をする会員。情報化展をきっかけに「シニアネットの活動を知って」入会される方もありました。

ＫＳＮ紹介は文化祭のポスター展示同様、こころをこめて用意しました、１回目はグランメッセ、次いでパレアでの展示に参加しました。

「メールだけでなく実際会って話してみるととても楽しいですよ」先輩シニアは自分自身の体験を新会員へ伝えています。新入歓迎会では迎えられた人が翌年実行委員になって「何でもよいから家から出てきて」と誘い出します。楽しい連鎖です。

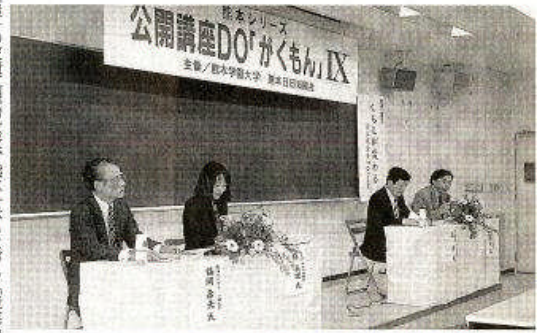
イリスでのブログ講習風景（ＫＳＮホームページより）

福岡壽夫副代表（当時）はネットの可能性とＫＳＮの交流のあり方をいろんな場（シニアネットフォーラムや他ネットとの交流の場）で伝えてきました。

いろんな方（講師）や企業の支えでＫＳＮの教育普及が支えられています。

熊本学園大で「ＤＯがくもん」

ＩＴの可能性探る



「くらしが変わる―人と社会をつなぐＩＴ」をテーマに開講された「ＤＯがくもんIX」＝熊本学園大

熊本学園大、熊日主催の公開講座「ＤＯがくもんIX」が十日、熊本市大江の同大であった。

テーマは「くらしが変わる―人と社会をつなぐＩＴ」。講師は同大経済学部の境章教授、商学部の波積真理助教授、熊本シニアネットの福岡壽夫副代表の三人。商学部の大野哲夫教授が司会を務めた。

境教授は、ＩＴ革命までの流れを説明し「個人が能動的に情報を得られるようになったが、機器の操作能力や情報の鑑識眼を磨く努力が欠かせない」と話した。波積助教授は、商店街がネット上で注文を受け配達する「電子御用聞き」の例を示しながら「産業の活性化にもつながる」とＩＴの可能性を強調した。

福岡氏は、五十―六十歳代の会員が中心のシニアネットの活動を紹介。「高齢者のための高齢者指導者養成や、各地域でメンバーが集う場づくりなどを進めている。ネットは孤立を防ぎ、学び合いながら楽しめるが、ネットを離れた交流も大事にしたい」と話した。

１年間連載した「熊本シニアネットぴぽぱネット」

また熊本日日新聞からは「ピポパネット」という欄から原稿を依頼されました。一部を中川和子さんやガメラさん、森山さんにいくつかネタや情報を提供してもらいました。ふさ子さんやへいべいさんには、ＹＡＨＯＯメッセンジャーの使い方では、夜遅くまで相手して頂き、分かったような記事を送ったこともありました。このようなド素人で１年間連載（毎週水曜日夕刊）できたのは奇跡でした。イラストの西島淳之介さんには記事にぴったり沿う挿絵を描いて頂きました。毎回締め切り間際まで原稿がまとまらず担当の熊日隈部記者もずいぶん苦労されたと思います。この項を借りて謹んでお詫びしたいと思います。つい字数が予定の数倍に達して、すべて大事そうな気がして、どこをどう削ればよいのか迷う場面ばかりでした。

紹介したのは特別なことではなく、パソコンやＯＳ自体が持っている機能について着目しました。使い方を知っていることですごく便利なものがあることに記事をまとめながら感心していたことも。何事も経験です。

5　（夕刊）　平成14年（2002年）10月2日　水曜日

熊本シニアネットの パソコン、ネット お助け塾

ピポパポねっと　いつでも IT 通信

ショートカットキーの活用②

マウスが苦手な人に便利

5　（夕刊）　平成14年（2002年）9月25日　水曜日

熊本シニアネットの パソコン、ネット お助け塾

ピポパポねっと　いつでも IT 通信

ブリーフケースのお勧め

ファイルをいつも最新に

他のネットワークや機関との交流

九州のシニアネットの交流「レトロｉｎ門司」

第一回総会にシニアネット久留米から応援が駆けつけた話を書きましたが、その後すぐにシニアネット久留米、シニアネット福岡、シニアネット北九州とシニアネット仙台を結ぶアクロスというネットワークが開通しました。そして連絡をとりあいながら２００３年１０月１６日～１７日には「レトロｉｎ　門司」と題してシニア交流祭を開催し熊本からも多数参加しました。　観光はもちろん、他県シニアとの交流も楽しいものでした。

その後しばらく他県のシニアネットのＮＰＯ法人化などの流れなどで余裕がなかったせいか中断しました。九州内の交流の復活が望まれていましたが、運営も落ち着いてきたのでしょう。２００８年秋には再開の運びで準備を進めています。

異文化交流

日米シニア井戸端会議のこと

日本と米国に住む日本人日系人シニアで電子メールで交流しようと立ち上げられたもので、シニアネット仙台理事長大内秀明、日米コミュニティ・エクスチェンジ（ＪＵＣＥＥ）によって呼びかけられ熊本シニアネットからも参加させて頂きました。正式には２００２年９月から２００３年２月までが区切りでしたが、その後の参加者の「やめないで！」という声に現在まで継続されています。

２００３年２月１１日には「日米井戸端会議イン熊本」がパレアで開催されました。これには米国トーランス・ラーニングセンターの若尾龍彦主宰、シニアネット仙台の佐藤和文副理事長（当時）、ＫＳＮ福岡代表（当時）の講演が行われました。３者のそれぞれの国や地域との関係、組織の運営や考え方の相違を学ぶよい機会になりました。このときのお話はＰＤＦ形式で記録してあります。ぜひごらんになってください（60P）。

http://www31.ocn.ne.jp/~hasehome/fukusi/jamame.pdf

日米井戸端会議は現在進行形

若尾さんと共同経営されている鶴亀さんが後に「戦時中潜水艦艦長で亡くなった父親の知人捜し」に二度来熊されました。（写真福岡顧問隣の方）今回は書籍の出版　記念をかねて熊本の仲間でお祝いしました。太平洋を越えたネット縁（網縁）の素晴らしさを実感した1日でした。この日米井戸端会議（ＭＬ）はそれぞれのネットの代表者が数十名が日々交流しています）

ペルーの原さんに会いに行ったミルクさん

日々かわされるメールの中で特に南米ペールの原さんのメールは現地情報を楽しく伝えてくれます。一度は行ってみたいなあ、と筆者は常々メールの末尾にはいれるのですが、なかなか実現しないのに、さーっと「これからブラジルとペルーへ行ってきます」そう言って颯爽と往来して現地情報を詳しく伝えてくれました。原さんからのフォルクローレのＤＶＤもちゃんと無事に私の手元に届きました。原さんには１７世紀の古いスペイン語を翻訳して頂いたこともあります。最近はペルー料理のレシピを頂きました。井戸端会議のメンバーは私にとってもとても大事な資源で

あります。

東北の雪ん子さんとの交流も

東北から井戸端会議に参加されている雪ん子さんはＫＳＮの日本縦断キャンピングカーの旅のメンバーが近所を通過する時間に合わせて、がらかぶさん御一行の面々にご対面。顔を合わせるはずもない人が出会って、これから先の旅の無事を祈るというのもまた不思議なＩＴ時代の出来事でした。

日米比較も庶民のレベルで・・

対岸の物価、子どもに対する考え方、９・１１に関する考え方、同じ日本人でありながらアメリカナイズされた思考や生き方、そのような内容のメールの中にたまに、古き日本人の姿も垣間見れる文章もあり、読むだけでも楽しいものです。関心があったところは時々参加メンバーがＫＳＮメインＭＬに情報を転送しています。

クラブ・趣味サークル活動

この指止まれ方式でこれまでにできたクラブは１０

ハイキングクラブ、竜田山散策、ゴルフクラブ、テニスクラブ、釣りクラブ、卓球、パークゴルフ倶楽部などさまざまなクラブがあります。デジカメクラブからは、毎月新聞社の賞をＫＳＮのメンバーが頂いているようです。囲碁クラブも活発です。

写真は昨年のＫＳＮバス旅行（九重の吊り橋）毎年目的知を変えて出発しています。帰る頃にはみんな仲良しです。

口コミやマスコミで広がる会員数

１９９９年の２１名から１０年後の２００８年７月の会員数は１２２０名へ。「もしもしこちら編集局」など新聞に問い合わせて入会された方もいて、何がきっかけになるかわかりません。

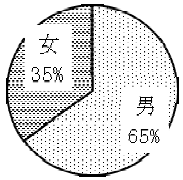
入会の特徴・・・ある年の断面調査

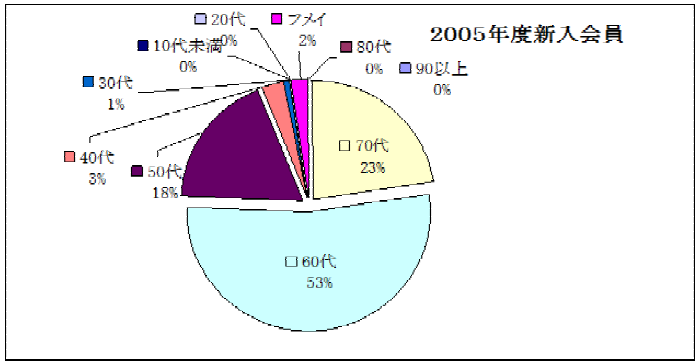
２００５年の入会者動向でみてみましょう。

１３３名が入会して男女比は男性６５％に対し女性３５％と男性の入会が多いようです。また入会された年齢は６０代が５３％、７０代が２３％この６０～７０代合計７６％を占めており、ついで退職前の助走期の５０代１８％と続いています。

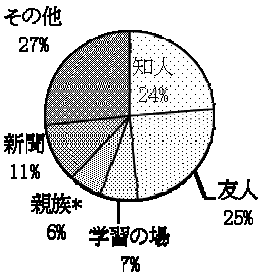
ＫＳＮへの入会の動機は知人＋友人がほぼ半分とマスコミの１割よりはるかに多いのが特徴です。当初入会時に「入会のきっかけ」を書く欄があって調査しやすかったのですが最近は入会の動機が少しつかみづらくなっています。

入会者　男女比較(n=131)





入会のきっかけ



保健福祉部のこと

専門の医師、専門職の方を講師にいろいろ学びました。介護・福祉・医療・暮らしの事柄についてみんなで話し合いながら学習を進めていますが、時の話題になったものが主題になったりします。

特にタイムリーだったのは「アスベストのお話」や「ＳＡＳ睡眠時無呼吸症候群」（池上先生）をお願いしたことです。板井先生に「検査値のはなし」我那覇先生に「口腔ケアのお話」その他いろんな生活に関わるお話では「ファイナンシャルプランナーのお話」もありました。ホスピス見学や特老見学なども実際に行いました。最近では後期高齢者についての学習会を上塚先生にお願いしてあまりにもひどい制度であることだという理解を深めました。知らないことで済ませられないことばかりです。今後も大いに知識を吸収していきたいと語る保健福祉部員です。

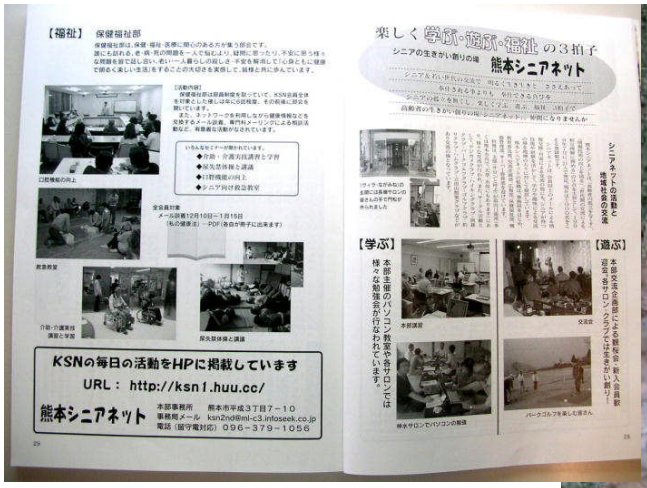
写真　右から検査の話、ＳＡＳ、アスベストの講師池上医師、ファイナンシャルプランナーのお話。最後の写真は病院ケースワーカの「病院へかかる時の制度のお話」など開催しました。

板井保健福祉部長の講演会

記念講演会「命の記憶」をＫＳＮ事務局で企画。保健福祉部部長の板井八重子先生（ＫＳＮ会員番号１番）の講義が２００７年夏にパレアで開催されました。この企画は「京都みなまた賞」を受賞されたことがきっかけでＫＳＮの全体学習会になりました。板井先生の水俣赴任のときの心境、どうしようと考えている時、ある胎児性患者さんとの出会いと東京に残る夫の「水俣へ行ったがよい」という一言に後押しされたこと。その後水銀汚染された魚を多食した地域での異常妊娠調査を行い、「生まれ出ることが出来なかったたくさんの小さな生命」があったことを「命の伝言」として会場に集まったメンバーに訴えかけられました。「同じ熊本に生まれてそんな深刻なことがあったとは」という感想が多く聞かれました。まだまだ不知火海沿岸の被害の全容もまだまだあきらかになってないその問題解決の一端にＫＳＮの会員医師が頑張ったことに保健福祉部としても誇りに思う１日になりました。

《シニア向け新聞発行された会員さんも》

保健福祉部に所属されていた向井孝子さんは『人生万歳』というシニア向けの新聞を定期的に無料配布されておられました。その集大成として



１冊（熊本のシニアの便利帳のような）の本として完成しました。中には保健福祉部の紹介もあります。

サロン（支部）活動について

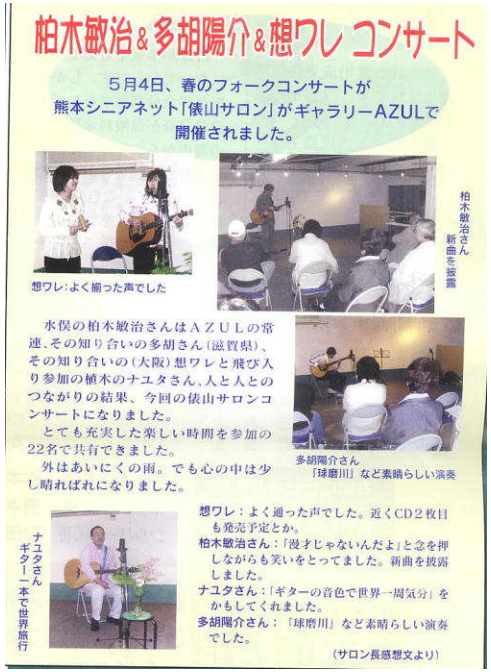
２００１年には早々に天草サロンが本渡のやまちゃんの自宅の一室を開放して発足しました。これはＫＳＮの対面コミュニケーションを可能とした一番目のサロンでした。

筆者が関わったサロンづくりは「黒髪サロン」と「俵山サロン」です。黒髪サロンの発足は熊本大学高齢社会総合研究プロジェクトで担当された学際科目「高齢社会どう生きる」の科目の中「高齢者の社会参加」の中でシニアネットの紹介をしたのが契機でした。そのお世話役をされていたのが嵯峨忠[*1]先生でした。授業が終わって昼食をしながら「この近くにシニアが集まれる場所はないでしょうね」と一言漏らしたところ、ニコリと笑って「ちょうどよい場所がありますよ」と構内のある場所に案内されることになりました。そこは、シニアのたまり場には最適な場所でした。「生涯学習研究センター」と表記されていました。嵯峨先生はその生涯学習研究センター教授に就任されていたのです。さっそくメーリングでそのことを報告し黒髪サロンで最初の会合を持つことができました。その中で小森さんがサロン長を引き受けて頂くことができました。サロン長の几帳面さで定期的なサロン行事の開催がされました。時には「知のフロンティア」など学内学習会にも参加しました。ところが２００７年３月、嵯峨先生の定年退職に伴い研究センターは他の目的の建物に改組されることになり、６年のサロンの歴史に終止符を打つことになりました。その後の黒髪サロンの学内存続は非常に困難でしたが、放送大学を利用したり多士会館を利用しながら、少し不便を我慢しながら現在も定期的（月２回）に活動を継続しています。シニアが何時でも集える場所が黒髪方面にほしいものです。

もうひとつは俵山サロンです。時々お邪魔していたのですが、西原村俵山の麓の森の中に書庫を改造した「ギャラリー国府堂」がありました。忽然と現れる建物にびっくりします。そこでは大きな音を立てても迷惑になることもなく、私の知り合いに野外コンサートなどやってみないかとすすめ、一方家主の西山さんには不定期にＫＳＮの俵山サロンとしてやれないか交渉しました。双方からＯＫが出たあとは数回俵山サロンのコンサートを開催しました。私が広報役としてメーリングに投稿したり、ホームページを作ったりしました。

*1嵯峨忠　熊本大学高齢社会総合研究プロジェクト「どう変わるどう生きる」二塚信　嵯峨忠　編著　九州大学出版会

ところが数年後、西山さんは一人住まいが寂しいので、娘さんがいる東京に行きたいと広大な土地と建物を売却したいことを告げられました。それはいいことかもと、あとを引き受けることにして俵山サロンを継続しているわけです。現在はプライベートギャラリー「ＡＺＵＬ」と名前を変えました。シニアネットが縁でギャラリーまで引き継ぐという予定外の出来事も網縁かもしれません。ここでは春夏秋冬の年４回をめどにサロンを予定しています。



柏木敏治＆多胡陽介＆想ワレ コンサート

5月4日、春のフォークコンサートが熊本シニアネット「俵山サロン」がギャラリーAZULで開催されました。

想ワレ：よく揃った声でした

柏木敏治さん 新曲を披露

水俣の柏木敏治さんはＡＺＵＬの常連、その知り合いの多胡さん（滋賀県）、その知り合いの（大阪）想ワレと飛び入り参加の植木のナユタさん、人と人とのつながりの結果、今回の俵山サロンコンサートになりました。

とても充実した楽しい時間を参加の22名で共有できました。

外はあいにくの雨。でも心の中は少し晴ればれになりました。

多胡陽介さん 「球磨川」など素晴らしい演奏

ナユタさん ギター一本で世界旅行

想ワレ：よく通った声でした。近くCD２枚目も発売予定とか。

柏木敏治さん：「浸才じゃないんだよ」と念を押しながらも笑いをとってました。新曲を披露しました。

ナユタさん：「ギターの音色で世界一周気分」をかもしてくれました。

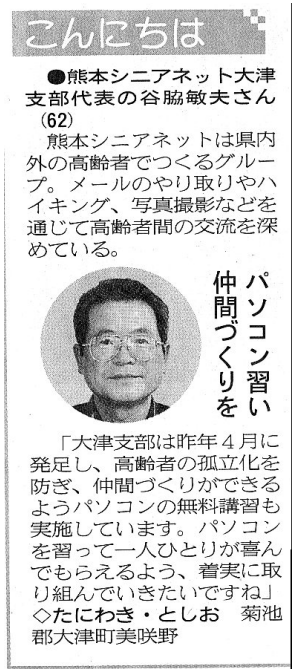
多胡陽介さん：「球磨川」など素晴らしい演奏でした。

（サロン長感想文より）

（俵山サロンの昨年の行事のひとつが向井さん発行の人生万歳にも紹介されました。）

その他それぞれのサロンがいろんなユニークな活動を行っています。

少し古い熊日新聞からの切り抜きです。大津サロンは大津町の施設を利用して５年を迎えます。



こんにちは

●熊本シニアネット大津支部代表の谷脇敏夫さん（62）

熊本シニアネットは県内外の高齢者でつくるグループ。メールのやり取りやハイキング、写真撮影などを通じて高齢者間の交流を深めている。

パソコン習い 仲間づくりを

「大津支部は昨年４月に発足し、高齢者の孤立化を防ぎ、仲間づくりができるようパソコンの無料講習も実施しています。パソコンを習って一人ひとりが喜んでもらえるよう、着実に取り組んでいきたいですね」

◇たにわき・としお　菊池郡大津町美咲野

その他のサロン

龍田サロン、大津サロン、長嶺サロン、神水サロン、益城サロン、水俣サロン、鹿島サロン、平成サロン、西部サロン、など１２か所、それに最近天草では５か所のサロンを発足させたという話題も入ってきています。それぞれの特徴あるサロン活動についてはＫＳＮ活動報告集やホームページへアクセスしてみてください。

世界のシニアネット

世界のシニアネットにはどのようなものがあるでしょう。主な国を紹介します

①米国　シニアネットのルーツは米国にありました。シニアネット（SeniorNet）は１９８６年に米国でＮＰＯ（非営利団体）として出発しました。「シニアの社会的孤立」をなくすためには「コンピュータが役立つ」という研究成果をもとに発足しました。ラーニングセンター（Learning Center）を設け”シニアに適したパソコン教育を行っていこう”という観点で各地に作られることになりました。その資金や援助の中心は大企業の資金とＩＴ関連企業などに働いている現役ボランティアや関連企業などの退職ボランティアが支えています。１９８６年といえば日本では、まだまだパソコンは庶民の手にはほど遠くパソコン通信にかかるインフラも電話料金もまだ未整備な状況で、一般庶民は手出しできずパソコンマニア、あるいは大学の研究者などを中心として利用されていたころの話です。最近では問題となっている高齢者の「デジタルデバイド解消」に力をいれています。

②韓国

米国と並んでＩＴを活用した韓国のシニアのネットワークに「元老坊 Woronban」は有名です。その後、より実用的で、ＩＴ起業をめざす活発なシニアが中心となる[インターネット集賢殿}につながっています。集賢殿は日本各地と連携をとった活動を展開しています。２００２年には、シニアネット久留米とシニアネット大分で日韓シニアの交流が楽しく行われました。

③ニュージランド

南半球のニュージランドでは米国のようなラーニングセンターを中心としたシニアネットがあります。ホームページは米国シニアネットの表紙に少し似ています。　参照）http://www.seniornet.org.nz/

１９９２年テレコムニュージランドが支援しウェリントンに設立されました。ラーニングセンター形式は北米以外最初で１００カ所のラーニングセンターを運営しています。

シニアは人的資源！活用しない手はない

「シニアのもつ力は人的資源のネットワークを支える。シニアネットの中心的課題や話題は常に動いている。流動の中で　①シニアはすべての人が資源である ②知恵を分かち合うことができる ③ゆるやかにつながるネットワーク④あるときは自分が資源に、ある場合は他人を資源に　⑤循環型ネットワークである。」この言葉はどなたかの発言だったと思うのですが私のノートに書かれていた文字を追うと、まさにＫＳＮのことを指している内容です。人材が豊かな熊本のシニアのネットワークは日々、形を変えながら新たな行事と出会いが創られています。それは趣味であったり「人」であったり様々です。

久留米の（第一回総会）古賀直樹さん、仙台の（第二回総会）佐藤和文さん、熊本の福岡壽夫顧問、魅力的な人のお話には説得力がありました。それに加えて（第五回総会）天田城介先生がおっしゃったシニアの特性についてなるほどと思うことばかりです。いろんな人の知恵をかりてこれからもＫＳＮの触手が様々な資源に伸び、きめ細かなネットワークを形成して一番の目的である「シニアの孤立・孤独をなくす」という運動が前進することを望んでいます。

その後のＫＳＮの動き

昨秋より「魅力的なＫＳＮを目指すプロジェクトチームを作って、様々な相談窓口にして、その結果を全員の共有資源にしようと、少しずつ動き始めています。保健・福祉・医療の分野は現在の保健福祉部とリンクする点もありますが、税金・相続・遺言やお墓の買い方、家の建て方、保険商品の選び方などあらゆるシニアの相談を一括俯瞰してデーターベース化してみようとの試みです。元銀行員や税理士、社会保険労務士の会員などそれぞれの知的資源を生かして問題解決にあたろうということです。その後はお互いが「気になる」関係づくりで安否確認を行うまでに連帯するとＫＳＮは文字通りのライフラインになるでしょう。（写真の北バイパスさんはこのプロジェクトの影の仕掛け人です。いろんなアイデアをお持ちです）

大学生にもわかるＫＳＮにするために

熊大学際科目受講者２００５年と２００６年の学生それぞれ約２００名の学生からもらったシニアネットに対する「疑問」と「感想」があります。これを主題に回答していくことが必要だと思います。なるべく近いうちに回答を試みたいと思います。

医学部 保健学科	と思います。「今シニアの人々はITをどう思って、どういう目でみているのだろうか？」と思いました。	高齢者が孤独を恐じず、楽しく過ごせる社会になっていけばいいなと思いました。
教育	IT関連に高齢者の方で仕事として携わっている方々についてもっと知りたいと思った。PC(メールなど)生き甲斐を見いだすのもよいと思うが体を動かすなど健康面ではどうなのだろう。	高齢者にとってネットなど手段は何であれ、人とのつながり"人とのふれあい"がとても大切だと思う。自分が年老いた時の生きがいは今から少しずつ見つけていても早すぎないのかもしれない。ネットで輪が広がる(日本を越える場合も)のは素敵なことだと思った。
医学部	シニアネットなど高齢者の活動には他にどのようなものがあるか。サロン、シニアネットの参加方法、紹介方法　地域にもこういう活動が浸透するためにはどうすればよいか。	今までインターネットは高齢者は出来ないし、やっていないと思っていたけど、この講義でシニアネットというものがあることを知り、インターネットで高齢者も交流が出来るということを初めて知った。高齢者も生きがいを見つけることで人生を楽しく元気に、そして目標を持って生きることが出来ると思うし、そういう高齢者のパワーを社会にどんどん活かしていければいいと思う。
薬学部	高齢者の8割が元気高齢者　残る2割はどうやっていきがいを見つけるのか	高齢者は孤独になりがちであるが、その対応策としてインターネットなどが使われているのには驚いた、しかしCPを使いこなせない高

エピローグ

１０年後それぞれの項目を見直してみると大体は理想が現実化されています。特にパソコン教室の自主運営では１３２名がシニア情報生活アドバイザーの資格を取得して講師活動に頑張っています。メールの初歩から表計算ソフトの応用や、画像処理、パソコン制作など多様なＩＴ講座を自主運営するまでに成長しました。

この冊子は詳細のデータなどを、削ぎ落として、ＫＳＮの活動を知ってもらうためのダイジェスト版として作成しました。長谷川の個人的な記録のほか、毎年発行されるＫＳＮの活動報告集やＫＳＮのホームページを参照にしました。

☆ダイジェスト版に納められなかった詳細は「サーバー管理部」「機器管理部」「ホームページ部」「本部」などです。また クラブ活動、サロン活動の大半を紹介しきれませんでした。交流概念図、地域活動一覧表や代表、顧問、サロン長などの人物紹介などもあれば、さらにＫＳＮの活動全般を理解しやすくなるでしょう。

謝辞

これまで熊本シニアネットの運用にはたくさんの企業・学校・個人からの支援を頂いています。特にホームページ運用については設立から数年間無償支援頂いた電子商取引振興会熊本（ＫＡＯＳＮＥＴ）の本山真潮様には深く感謝いたします。

現在、九州電力のイリスはＰＣ教室で、各サロンは特老や町の施設の一部一部をお借りして運営していて大変お世話になっています。

熊本シニアネットのメーリングリストについては ksn@fml.kumagaku.ac.jp （１０年来現在も変化ありません）は 熊本学園大学にお世話になっていますが、特にサーバ管理部門の森山さんには名実ともに頼りがいあるＭＬ管理者としてＫＳＮＭＬは支え続けられています。

また日々の入会やアドレス変更など会員管理として会を支えておられる尾方様ならびに、事務局、ホームページ担当、機器担当、交流企画部や各地のサロン担当の皆様にも感謝します。

長谷川　博
shiro@ac.mbn.or.jp